

特集

小樽運河100年

小樽を愛する3人

「私と運河」



今年12月、小樽運河は完成から100年の節目を迎える。いまや小樽観光に欠かせない人気スポットだが、かつて運河の埋め立て計画を巡る激しい論争が起こり、「小樽運河を守る会」(以下「守る会」)による精力的な保存運動があった歴史を知る人は多くないだろう。

小樽を愛する人にとって、運河は単なる「景観」以上の意味を持つ。「月刊おたる」発行人の山本一博氏、「守る会」の中心メンバーだった小笠原眞結美氏、北海製罐第3倉庫の保存に尽力する「利尻屋みのや」創業者の箕谷修氏に「私と運河」というテーマで話を聞いた。

(フリーライター・内海達志)

「守る会」のメンバーはよく頑張った 運河周辺に夜の賑わいが欲しい

山本一博氏



〈やまもと かずひろ〉小樽市出身。北海道ファミリー株式会社代表取締役会長。平成30年8月から『月刊おたる』発行人を務め、令和4年10月号で通巻700号を迎えた。

物心がついた頃の運河は、すでに本来の役目を終え、ヘドロがたまり、メタンガスが出ているような汚い状態だったから、思い入れはあまりないね。運河の存在を強く意識するようになったのは、就職先の東京から小樽へ帰ってきたあと。

ちょうど「守る会」が保存運動を頑張っていて、「ポートフェスティバル」なんかはとてもよかった。17年もやったのは立派だけど、財政的な問題もあって、ずっと続けるのは難しかったんだろうな。同じ場所で「潮まつり」をやっているしね。

まだ「観光都市」になっていない当時は、経済重視の風潮が強かったので、アンケート

を取ったら、6・4で道路派が多かったんじゃないかな。

俺は(北大)経済学部経済学科卒で、青年会議所の活動をしてきたから、経済の視点で物事を見ていたけれど、でも実際は経済学部文学科みたいな感じだったから、心情的にきれいな運河なら全部残すべきと思っていた。そりゃ、今になって

みれば「全部残しておけば」という声もあるよ。ただ、当時の雰囲気はそうではなかったからね。運河論争以前は、邪魔者扱いをされていたんだから。

「守る会」の人は「負けた」と言っているよ。うだけど、あの厳しい状況のなか、本当によくやったと思うよ。負けてはなく、「引き分け」だよ。

半分は道路になってしまったとはいえ、運河は小樽の象徴。「月刊おたる」の表紙絵でも運河がよく描かれていたのは、どこを切り取っても絵になるからだろうね。これからは大事にしていかなければならないし、運河周辺に賑わいを創出していく必要もある。

夜なんか、パタッと人通りが絶えて、ゴーストタウンみたいだから、堺町通りですら飲食店は閉まっているし、運河のあたりは真っ暗だ

北運河の開発がカギ



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)